

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00172

研究課題名（和文）平安時代の仏画と世俗画の境界をめぐる比較美術史的研究

研究課題名（英文）A Art Historical Study on the Interaction between Buddhist painting and Secular painting at Heian period

研究代表者

増記 隆介（Masuki, Ryusuke）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：10723380

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、平安時代における仏画制作、特に12世紀のそれにおいて、本来世俗画的な絵画（肖像画、山水画、花鳥画等）に用いられていた絵画技法がどのように取り入れられ、さらにその取り込みによりどのような意図、宗教的な背景があったのかを明らかにすることを旨とし、主に同時代の中国絵画等との比較を通じて、その意義と我が国における仏画制作の特性について調査、考察し、所定の成果を得たものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国宝「普賢菩薩像」（東京国立博物館）に代表される平安時代後期の仏画には、本来世俗的な絵画（肖像画や絵巻物等）に用いられる技法を意識的に取り入れたものがある。そのような技法の採用がどのような意図、信仰的な背景を伴って行われたものであったのか、特に上記の普賢菩薩像の修理プロジェクトに関わることで得られた新たな情報を取り入れながら明らかにし、我が国における仏画制作の重要な側面を浮かび上がらせた。

研究成果の概要（英文）：In this research project focused on the interaction between art technique of Buddhist painting and Secular painting in the Heian period(794-1185) Japan. And we found the religious back ground of this interaction.

研究分野：仏教美術史

キーワード：仏画 世俗画 聖性 聖と俗 作画技法 平安時代 北宋時代

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、先に報告者が助成を受けた基盤研究(C)「仏教絵画における水墨技法の受容に関する比較美術史的研究」において明らかにした東アジアの仏教絵画における水墨技法受容の様相を前提として、対象領域を拡大した上でそれらを分類整理し、平安時代を中心に仏画と世俗画という絵画領域を設定、その境界の動的なありようを主に作画技法の共有という観点から明らかにすることを目指したものである。その背景として、本研究の前提となる作品の詳細な観察に基づく研究成果は、多くの優れた作品に日々接し得る日本の研究者に対して、海外の研究者から求められる作品に関する重要な情報の提供を含むものである。このような詳細な観察に基づく研究が求められていることは、報告者が長年にわたり研究上の交流を深めてきたコロンビア大学マシュー・マッケルウェイ教授やハーバード大学ユキオ・リピット教授等との対話から認識したものであり、2019年度秋、コロンビア大学において当該研究課題に関する講義を行うことが決定していたことも、この時期に研究を発信し、さらに海外の研究状況も反映しながら研究をより精緻かつ国際的なものに改善し得る前提となった。また、国宝「不動明王二童子像(青不動)」、国宝「源氏物語絵巻」など近年の文化財修理の成果により、表面からの観察のみでは明らかにし得ない絵仏師、絵師の絵画技法の具体的な様相が明らかとなっており、本研究はこのような作品をめぐる最新の動向をも反映したものであった。また報告者は、2018年夏、京都国立博物館において多くの研究者の参加を得て開催された「研究発表と座談会 平安後期の絵師の工房をめぐる諸問題」の司会を務め、仏画と世俗画という領域を画家の問題から検討するという研究課題が平安絵画史研究の重要な論点であること、また気鋭の研究者がそれぞれの立場からこの研究課題を検討していることを強く認識した。本研究は、これらの研究成果をより広い時代、広い地域、大きな視点から俯瞰しつつ総合し、国際的に発信、平安絵画史研究に新たな視野を拓くものとして開始された。

## 2. 研究の目的

従来の研究において、仏画の制作目的やその信仰背景については、主にその依拠する図像や経典を特定することにより明らかにされてきた。本研究独自の目的は、現存する絵画自体に備わる作画技法を詳細に調査し、検討することによって技法が本来的に有する属性、すなわち絵仏師によるもの、絵師によるもの、さらには女房などの素人画家によるものを見極め、主題と技法の境界の「ずれ」に注目する。そして、そこに込められた意図、例えば、仏画に世俗画(人物画や肖像画)の技法を用いることにより仏画に人に近い肉体を有するような生身性を付与するという意図、逆に名所としての春日野の風景を描く世俗画の伝統に仏画の装飾技法を用いることにより春日曼荼羅が成立するように、世俗画に聖性を付与するという意図を検討することを通じて、その背景に広がる信仰の深層を明らかにする点に目的がある。このような研究方法は平安時代の仏画研究と世俗画研究が別分野として異なる研究者によって担われてきたこれまでの日本絵画史研究の中では試みられてこなかった独創的なものである。また、同時代の中国、唐・五代・北宋・南宋においては、『図画見聞誌』『画継』等の画史の記述や『宣和画譜』のジャンル別の画家伝から、それぞれが得意とする画題はあるものの宮廷絵師、在野の職業画家が仏画、世俗画の双方の制作に関与している状況が明らかであり、また北宋初期の巨然や南

宋末の牧谿のように出家した僧が絵画を制作する「画僧」は存在するが、仏画製作者が出家し、法名を名乗って活動する絵仏師という存在は確認できない。このことは、中国においては、仏画と世俗画の境界がより曖昧であり、双方の技法が多様に交流していたことを推察させる。例えば、北宋の「孔雀明王像」(仁和寺)の明王には世俗画の人物表現が、孔雀には花鳥画の表現が盛り込まれていることは、作品観察から明らかである。このような中国における絵画領域の曖昧さが、中国からの水墨技法の受容などを通じて我が国に波及したことが、領域横断的な絵画制作を促した可能性が推察される。このように本研究は、単なる独創性にとどまらず、東アジア絵画史という比較史的な視点を援用することにより、新たな研究交流や研究領域の創出、展覧会等に還元される社会的波及効果を及ぼすことを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究の学術的背景は、例えば、白描技法による国宝「鳥獣人物戯画」(高山寺)の画家をめぐって、絵仏師説(中野玄三)、宮廷絵師説(五月女晴恵)の二説が長く並存していることによって象徴される。そして、このような見解の相違を生み出す画家の作画領域が曖昧となる現象は、平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて、二領域間での素材、型、様式の共有へと進展し、承元元年(1207)後鳥羽院御願の最勝四天王院障子絵に絵仏師・尊智と宮廷絵師・兼康がともに名所障子を描くという状況を生み出す。本研究は、その境界が揺れ動くさまを、当該期の絵画作品の詳細な調査を通じて具体的に明らかにするとともに史料にあらわれた絵仏師と絵師との関わりに照らしながら平安絵画史を制作者の視点から書き直すことを目指すものである。あわせて、前述のように画僧は存在するものの、絵仏師という存在を有さない中国北宋及び南宋の絵画様式との比較検討を行うとともに、画家の社会的地位を比較することによって、当該期の日本の画家の独自性を明らかにする。

平安時代後期の仏画には、これまでの研究史の中で、その制作に世俗的な絵師の関与が想定される作品の存在が指摘されている。具体的には、

国宝「仏涅槃図(応徳涅槃図)」 応徳三年(1086) 高野山金剛峰寺

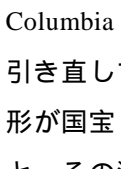
国宝「密教両部大経感得図」 保延二年(1136) 藤原宗弘筆 藤田美術館

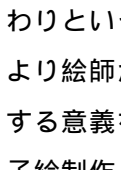
国宝「普賢菩薩像」 12世紀半ば 東京国立博物館

をあげることができ、また、鎌倉時代13世紀の作品として

重要文化財「普賢十羅刹女像」 個人蔵



が知られている。これらについて、画家が明らかな 以外は、主に作画技法の観点から絵師の関与が指摘される。 については、絹に描かれた仏画の基本的な技法である裏彩色の不採用が修理時に明らかとなっており、また、釈迦や菩薩の面貌などに制作途中で大きな改変が加えられていることも、枠張りした絹を透過して下絵を写し制作する仏画においては、通常生じない変更であると言える。一方で、裏彩色の不採用、図様の変更のいずれもが、国宝「源氏物語絵巻」(徳川美術館・五島美術館)に代表される絵師が紙に濃彩を用いて描く「つくり絵」には認められる。さらに、菩薩の身色を白と黄色に塗り分け、前者には墨による輪郭線を、後者には朱によるそれを用いること、通常朱線で引かれる下瞼の線を墨で明快に引くこと、また釈迦の髪際線に朱を配することなど、絵仏師による仏画には見られない色彩感覚を示す点も絵師の制作を示唆し、具体的には白河院政期に活躍した絵師・藤原基光の関与が推察されている(有賀祥隆『日本絵画史論攷』中央公論美術出版、2017年)。 については後述する。また、 につい


ては、肉身の輪郭に淡墨線を用いること、つくり絵を思わせる濃厚な白色を厚く彩色することなどが通常の仏画と異なる点として注目される。前者については、白色の菩薩に墨線を用いるに連なるものであるが、応募者は、敢えて淡墨とする技法の淵源が北宋時代の仏画にあることをすでに明らかにしている(増記隆介『院政期仏画と唐宋絵画』中央公論美術出版、2015年)。また、淡墨線の利用が、『古事談』に記された性空上人と神崎の遊女としての普賢菩薩の邂逅説話に代表される生身の普賢菩薩の眼前を希求する平安時代末の信仰を反映したものであり、物語絵や肖像画の輪郭に用いられる墨線の使用が、仏画の世俗画への接近による「生身性」を表象する技法であることを明らかにした(Ryusuke Masuki, *Underlying the "Vision" of Heian Buddhist painting. Movement and Materiality in Japanese Art*, Mary Griggs Burke Center for Japanese Art in Columbia University, 10<sup>th</sup> March 2018)。また、については、普賢菩薩の蓮台に墨線を何度も引き直して形を整えるつくり絵的な技法が認められるとともに周囲に配された十羅刹女の造形が国宝「紫式部日記絵詞」(藤田美術館・五島美術館他)とその「型」を含めて一致すること、その淵源が後白河天皇によって制作された「年中行事絵巻」に遡ることを指摘し、後堀河院の周辺の絵師により制作されたことを明らかにしている(『院政期仏画と唐宋絵画』)。

以上のように、本研究は、これまでに技法の側面から指摘されてきた仏画制作と絵師の関わりという視点を出発点として、の分析に見られるように仏画に求められるものの変化により絵師が仏画の世界へ進出する端緒が開かれた可能性を問うことで当該期の仏画制作が有する意義を絵画的、宗教史的、歴史的に明らかにした。また、逆に最勝四天王院の名所障子絵制作という宮廷絵師の制作の場への絵師の参入という状況の背景には、絵師による五台山や補陀落山といった山水表現を伴う聖地図像制作の蓄積があることが指摘されており(谷口耕生「鎌倉時代やまと絵の形成」、『日本美術全集第8巻』小学館、2015年)。中国由来の聖地図像が中国において如何に成立し、中国の山水画史においてどのような作例を残し、どのような意義を有したのかを問うことにより絵師によるこれらの図像とやまと絵山水との融合という現象が東アジア絵画史上に占める位置を明らかにすることを目指した。

#### 4. 研究成果

本研究の成果としては以下にあげられるような図書の公刊、論文の執筆、研究発表等に集約されているが、特に2019年秋にコロンビア大学において、当該課題に関する講義(全13回)を行うとともに、同大学院学生とともに、メトロポリタン美術館・ボストン美術館・フリーアギャラリー等に所蔵される仏画作品を調査することによって、我が国の現在における仏画研究の具体的な方法や作品の調査法、作品の理解の方法などを実地的に教授し、それらによって優れた学期末レポートが学生によって執筆、提出された。このことは、この研究成果が、時代を担う研究者たちによって国際的に継承、認知されたことを意味し、今後の国際的な仏画研究の土壌の一端を形成するに至ったことが特筆される。

また、この期間中に行われた国宝「普賢菩薩像」(東京国立博物館)の修理委員会の委員を委嘱されたことによって、当該作品の技法の細部、及び修理時にのみ観察が可能となる画面裏の裏彩色の状況などを把握することができたことにより、下記の論文、、など、当初想定していた上記の研究手法以上の成果を得た。

さらに世俗画の分野においても書籍、論文、等、報告者の従来 of 当該分野の研究に倍する成果を得た。

【書籍】

増記隆介監修 『鳥獣戯画決定版 「絵の原点」にふれる』平凡社、2021年5月、148p

増記隆介ほか 『四天王寺所蔵 国宝扇面法華経冊子』四天王寺、2021年9月、151p

【論文】

増記隆介“Underlying the ‘visions’ of Heian Buddhist Paintings: The Flames of the Shōren’in *Ao Fudō* and White Gemstone Body of the Tokyo National Museum *Fugen Bosatsu*”, *Kobe Review of Art History*, Vol.20, Feb, 2020, pp.1-17、査読あり

増記隆介「平安時代の仏画制作とその修理」、『日本の表装と修理』（岩崎奈緒子他編）、勉誠出版、2020年3月、pp.229-264、依頼原稿

増記隆介「普賢菩薩の聖と俗 東京国立博物館普賢菩薩像の淡墨線をめぐって」、『日本美術のつくり方 佐藤康宏先生の退職によせて』、羽鳥書店、2020年12月、pp.3-29、依頼原稿

増記隆介「仁和寺孔雀明王象とその周辺」、『アジア仏教美術論集 東アジア 五代・北宋・遼・西夏』、中央公論美術出版、2021年3月、pp.267-297、依頼原稿

増記隆介「十六羅漢図」、『国華』第1511号、2021年9月、pp.61-66、依頼原稿

増記隆介「五島美術館蔵 駿牛図」、『国華』第1513号、2021年11月、pp.24-26、依頼原稿

増記隆介「後堀河院の絵巻制作と蓮華王院宝蔵」、『コレクションとアーカイヴ 東アジア美術研究の可能性』、勉誠出版、2021年12月、pp.263-297（全508p）、依頼原稿

以上。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 MASUKI Ryusuke	4. 巻 20
2. 論文標題 Underlying the 'Visions' of Heian Buddhist Painting: The Flames of the Shoren' in Ao Fudo and White Gemstone Body of the Tokyo National Museum Fugen Bosatsu	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術史論集	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 増記隆介	4. 巻 1511
2. 論文標題 十六羅漢図	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国華	6. 最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 増記隆介	4. 巻 1513
2. 論文標題 五島美術館蔵 駿牛図	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国華	6. 最初と最後の頁 24-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 増記隆介
2. 発表標題 宋代仏画の「展開点」としての清浄華院「阿弥陀三尊像」
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所「見える」「見えない」共同研究班研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 増記隆介
2. 発表標題 「鳥獸戯画」とは何か？
3. 学会等名 神戸大学美術史研究会総会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 増記隆介
2. 発表標題 ガラス乾板から再現された法隆寺金堂壁画の美
3. 学会等名 法隆寺講演会「国宝・法隆寺金堂の謎に迫る」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 MASUKI Ryusuke
2. 発表標題 “Myoe as Kukai : The Buddhalocani Painting in Kozanji and Myoe ' s Image-building Strategy ”
3. 学会等名 Special Lecture for Mary Griggs Burke Center for Japanese Art in Columbia University（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 増記隆介
2. 発表標題 正倉院宝物と鳥獸戯画
3. 学会等名 鳥獸戯画研究の最前線（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 増記隆介
2. 発表標題 後白河院時代の絵画制作と宝蔵
3. 学会等名 仏教文学会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 増記隆介
2. 発表標題 後白河院崩御後の蓮華王院宝蔵 宝蔵絵の去就をめぐる諸問題
3. 学会等名 シンポジウム「宝物とそのいれもの」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 増記隆介
2. 発表標題 仏画四大展覧会
3. 学会等名 仏教芸術学会連続講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 板倉聖哲・高岸輝編 増記隆介他著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 羽鳥書店	5. 総ページ数 750
3. 書名 日本美術のつくられ方 佐藤康宏先生の退職によせて	



1. 著者名 板倉聖哲・塚本麿充編 増記隆介他著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 700
3. 書名 アジア仏教美術論集 東アジア 五代・北宋・遼・西夏	

1. 著者名 古田亮編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 434
3. 書名 教養の日本美術史	

1. 著者名 岩崎奈緒子他編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 432
3. 書名 日本の表装と修理	

1. 著者名 増記隆介監修	4. 発行年 2021年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 148
3. 書名 鳥獣戯画決定版 「絵の原点」にふれる	

1. 著者名 増記隆介他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 四天王寺	5. 総ページ数 151
3. 書名 四天王寺所蔵 国宝扇面法華経冊子	

1. 著者名 板倉聖哲他編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 508
3. 書名 コレクションとアーカイヴ 東アジア美術研究の可能性	

1. 著者名 石川知彦監修	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 302
3. 書名 聖徳太子と四天王寺	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

米国	Columbia University	Metropolitan Museum of Art	Freer Gallery	他2機関
----	---------------------	----------------------------	---------------	------